

## 稲岡先生を悼む

去る9月5日、長年本学会理事をお務めになられました稲岡章代先生がご逝去されました。稲岡先生はいつも笑顔で子どもたちを勇気づけ、人間味溢れる授業をされていた。また、多くの英語教師の悩みにも真摯にお応えされ、多くの先生方を励ましてこられました。これからは天国でどうか私たちを見守ってくださいませよう、心よりお祈り申し上げます。合掌。

会長 加賀田哲也（大阪教育大学）

稲岡先生への追悼のお言葉をいただきましたので、以下、紹介させていただきます。

### <稲岡先生の何気ないことばから>

樋口 忠彦（特別顧問）

10数年前、ひとりの学生が近畿大学の研究室に私を訪ねてきました。図書館で偶然手にした『英語教育』の「通信欄」に、中学時代の英語の恩師・稲岡章代先生と私の名前が並んで掲載されているのを目にし、稲岡先生に久しぶりにお会いしたくなり、法学部の学生であるが、英授研の例会に参加してもよいかということでした。

以下、何年も前の教え子からも慕われる稲岡先生の英語授業に対する基本的な姿勢を、先生が何気なく話されたことばからいくつか書き留めておきたいと思います。

・生徒の本音を理解する・・・small talk や chat, 新教材の導入等をうまく展開するには、適切な話題を選ぶことがポイントです。そのためには、生徒が本音を語る昼食時間や清掃時間に、生徒とできるだけ会話をするように心がけています。

・授業準備にしっかり時間をかける・・・単元指導計画や学習指導案など、いくら時間をかけて検討しても納得のいくものが作成できない場合がよくあります。そのような場合、他の用事—例えば、自分や家族のお弁当づくりをしていると、<ふあっ>とよいアイデアが浮かんでくることがあります。授業準備に一生懸命取り組んだ時間は決して無駄にはなりません。

・できるだけ英語に触れ、使う・・・稲岡先生はいつも大きな声で、表情豊かに、明瞭な英語で生徒に語りかけておられましたが、先生に英語上達の秘訣を尋ねたことがあります。

先生はもともと英語が得意だったようですが、産休の際まとまった時間があつたので、毎日、徹底的にリスニング練習を行ったこと、そしてリスニングを徹底的に行うことによって英語が自然に口から出てくるようになったこと、またその時の経験から、その後もできるだけ多く英語に触れ、使うようにしている、ということでした。

稲岡先生は、英授研で研究発表や英語授業を何度も行ってこられました。いつも前年度あるいは前回より一歩進んだ提案をされ、英授研会員に英語授業と英語教師のあるべき姿について多くの示唆を与えていただきました。

稲岡先生、ありがとうございました。天国でどうかごゆっくりお休みください。

### <“She was born to be an English language educator.”>

高橋 一幸（理事、元会長 神奈川大学）

稲岡章代先生は、まさに神様が天から地上に遣わした英語教師と思える人でした。今、先生を偲ぶ追悼文を書いていること自体が信じられず、思い浮かぶのは、生徒たちを慈しむいつもの「あの笑顔」ばかりです。

稲岡先生は、私のもう一人の姉御である加藤京子先生に続く英授研創成期からの会員で、理事として長年に渡り英授研発展の中心的役割を果たしてくださり、2000年には樋口忠彦先生のご推挙によりパーマー賞も受賞されました。私が関西にいた頃は、同志、友人、良きライバルとして切磋琢磨し、稲岡・加藤・高橋の三人で授業のこと、生徒のことを語り合っていました。三人ともまだ30代で元気溼刺な頃でした。

30年近い交友の中で、稲岡先生の授業は、幾度となく拝見してきました。子ども達を先生への信頼感と安心感の中で、温かく慈しみながら伸び伸びと自由奔放に活動させながら育てていくその授業から、大きくて柔らかな手の上で、暴れ廻る孫悟空を遊ばせている「お釈迦様の手の平」を連想したものでした。先生の授業は、コミュニケーション活動が授業過程のある部分に特設されているというよりも、50分間の授業そのものが、先生と生徒、生徒同士が心を通わせるコミュニケーションでした。「人と人との心を結ぶ“ことば”としての英語による多感で不安定な中学生の人間形成」、それが彼女の英語教育であったのだと思います。何度も観させていただいた授業は、いつもその根幹となる理念と設計は同じでありながら、どこかに先生が目的を持って意識的に変えた「マイナーチェンジ」が見られました。例えば、拙著『成長する英語教師』の第4章「奥伝」（大修館書店2011）で取り上げた2007年度とその3年後の2010年度の英授研全国大会で公開された姫路市立豊富中学校2年生の未来の助動詞willを扱った授業は、「教師の目的を持った意識的な授業のマイナーチェンジが生徒の劇的な変容をもたらすことがある」という典型的な事例であり、生徒を伸ばす教師の成長を目の当たりにしました。稲岡先生は、天国に召し戻されるその瞬間まで、ひと時も止まることなく生徒たちのために成長し続けた教育者でありました。

天上より英授研や我々の今後を見守ってください。英授研はもとより日本の英語教育への多大なご貢献に感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。

## <日本一の英語教師>

加藤京子（理事，兵庫県立北条高等学校・非）

「70歳まで教えられる，場合によっては72歳まで教えることができるって言われて。」

こうおっしゃった時の稲岡先生の笑顔が目に浮かびます。定年退職を目前に公立中学校を早期退職し，母校である賢明女子学院に移られた直後にお会いした時のことです。母校の英語教育の改革のために強く請われて移られたのですが，公立中学校で定年まで教えたいという気持ちもあるなか，その迷いの背中を押したのが「賢明では72歳まで教えることができる」という言葉だったようです。9月5日，突然に逝ってしまわれた先生にむかって心の中で「72歳まで教えるって言っていたのに」となじるように繰り返しています。

稲岡先生との出会いは40年近く前に兵庫県の教育研修所で見た授業ビデオでした。中学1年生に **There is ～/ There are ～**.を導入する指導をテンポよく英語だけを使って進めておられました。「中学生にも英語で英語を教えることができますよ」という強い励ましのメッセージを感じました。そのビデオとの出会いで私は授業を英語で進める工夫を始め，そのことが私を英授研に導きます。そして，英授研でビデオによる授業研究の授業者を探した時に，お会いしたこともないままお願いの電話をかけ，快諾していただきました。それがきっかけで稲岡先生は英授研に入会し研鑽され，その後の大活躍につながっていきます。英授研に入会される前から授業巧者として有名でいらしたのですが，稲岡先生は英授研での学びがご自身にとって非常に大切であるとよくおっしゃり，いつも謙虚にそして貪欲に学んでおられました。

稲岡先生は大学で学ぶのは音楽か英語かで最後まで迷われていたけれど，お父様が「英語教師へ」と勧められたことで英語教師への道を進まれたそうです。そのお父様がお元気でいらした頃，姫路城の前で「姫路城は日本一のお城です。」と言われました。「そうですね。でも姫路にはもう1つ日本一がありますよ。」と返した私に，「何でしょう？」とげんな顔。「章代先生。日本一の英語の先生です。」と申し上げるとお父様は一瞬言葉に詰まられ，そして目元を潤ませるようにして「ありがとうございます。」と言われました。章代先生は努力の人でした。そしてそのことを一番知っておられたのがお父様でした。稲岡先生の天才的に素晴らしい授業の裏には不断の研究と努力があったこと，そして何よりも授業をすることを愛しておられたことを忘れないでいたいです。

## <稲岡章代先生へ>

河合光治（理事 神奈川県相模原市教育委員会）

稲岡先生の訃報を聞き，驚きと悲しみの気持ちと同時に，「約束を守れなかった」という後悔の思いでした。

今から18年前，平成13年8月26日に開催された第6回英授研サマーセミナーが稲岡先生と私との出会いでした。何もわからない大学4年の私でしたが，その人柄と「授業は私自身です」という言葉の通りに生き生きと授業をされる姿にすぐに惹き込まれました。その後は，姫路に押しかけて夜中まで相談にのっていただいたり，私の地元でワークショップ

プをしていただいたりしました。今、稲岡先生との色々な場面が、先生の笑顔とともに思い浮かんでいます。

稲岡先生の授業の最後は必ず、Closing Message で終わります。平成 22 年に拝見した will の授業では、1 週間の職場体験学習を前に緊張する生徒たちに、I hope you will have very great Trial Week. You can do it! Please make your wonderful and beautiful Trial Week. と稲岡先生が励まします。すると、生徒が力強く I WILL make wonderful Trial Week. と応じて、授業は終わります。

英語という「ことば」を通して、相手を、そして自分を大切にすること、そして、「ことば」によってでは表しきれない大切なものと一緒に相手に運んでいることを、ひとり一人の生徒に伝えていたのだと思います。それが稲岡章代先生の授業であり、私が稲岡先生から学んだプロの教師としての哲学です。

稲岡先生、今頃、天国で何をなさっているのでしょうか。ひとつ、先生に謝りたいのです。私の授業の助言者をしていただくという約束を果たすことができませんでした。天国から私の授業を見ていてくださいね。先生から学ばせていただいたことを決して忘れません。本当にお世話になりました。そして、ありがとうございました。

稲岡先生の教え子の一人より

## 関西支部 第 31 回 秋季研究大会報告

2019 年 10 月 20 日（日）に大阪商業大学において、英語授業研究会関西支部第 31 回秋季研究大会が行われました。当日のプログラムの参加記をご紹介します。

### 映像による研究授業と研究協議

中学校：「教科書の題材をもとに、身近な問題について様々な視点から考え表現する授業（中 3）」

授業者：津田 優子（京都府南丹市立園部中学校）

本発表は昨年度まで津田先生がおられた京都教育大学附属桃山中学校 3 年生を対象としたものである。NEW CROWN Lesson 5 “Places to Go, Things to do”を題材に最終的なパフォーマンス活動を「海外からの訪問者が感じる困りについて考え、日本を様々な視点から見ることにより日本が改善すべき点について考え



る」と設定し授業を展開された。京都の観光地の近くで普段から外国人観光客と接する機会が多い学校の立地を生かし、生徒の生活にも根差した身近でかつ批判的思考力を培う課題設定である。

授業はまず津田先生の流暢な **all English** で本時の **goal** を示すところから始まった。まずは外国の人から見た日本の良い点や奇妙な点を 4 人 1 班で意見を出し合い、その後ホワイトボードを用いて発表しクラスで全体共有をする。生徒からは“**Make menu written in English**”, “**Japanese toilet style**”, “**Traffic jam**”など様々な案が出た。その後実際に外国の人が考える日本な不便な点が英文で書かれたワークシートをジグソーリーディングで読んでいく。同じパートのクラスメートと内容確認をしあった後、自分の班に戻り、読み取った内容を班の他のメンバーに伝えていく。まるでパズルがはまるように、班全員がワークシートの内容理解をしていく姿が見て取れた。圧巻だったのが、ワークシートの読み取りで終わるのではなく、実際に外国人が不便と感じることのインタビュー映像を生徒に紹介したことである。韓国人留学生と以前 **ALT** であったアメリカ人教師のインタビューを見せることで **listening** 理解にも焦点をあて、また同時に生徒が「聞きたい、理解したい」と思わせる工夫に富む **authentic** な教材作りをされていた。本発表では時間が足りずできなかったと仰っていたが、次時に生徒自身が外国人のために改善できる点がないか発表し、最終的に行きたい国についてグループ内プレゼンテーションを行ったそうである。

コメンテーターの泉先生からは、次期学習指導要領を見据えた非常にチャレンジングな授業であったこと、その中で小中の連携から継続的に行っている振り返り活動が充実し生徒のメタ認知の発達に役立っていたこと、意見の交流をすることで他の価値観や物の見方に気づき新たな学びにつながっていること、何より学習者中心の主体的・対話的で深い学びとなっていることなどが挙げられた。課題としてはいかに談話やまとまった英語使用ができるように今後生徒を育てていくかなどを挙げられた。

授業を通してまず感じたのが、津田先生が入念にそして生徒が興味を持てるように教材を準備されているという点である。流暢な **All English** でほぼ授業を展開なさっているが、どうしても生徒がわからないところは日本語で説明、かつスモールステップで授業に取り組むことで全員が積極的に授業に取り組むことができていた。生徒が興味を持てる伏線をたくさんはり、学びの共同体としての **active learning** が成功していた。また個人的に話を伺ったところ、本時では韓国人とアメリカ人のインタビューを見せているが、前時までにはメキシコ人のインタビュー映像も見せていたそうだ。欧米圏のみでなく、たくさんのアクセントを生徒に聞かせることで、**global language** としてより身近に生徒も英語の使い方を感じたことだろう。生徒へ生きた英語を学ばせたいという津田先生の思いが伝わってきた。今年度から異動され、また新たな出会いをされている津田先生であるが、生徒たちはきっと先生の丁寧な愛を感じ、使える英語力を育成していつていることだろう。「主体的・対話的で深い学び」の一つのモデルとなる素晴らしい授業であった。

熊上 絵里（枚方市立第三中学校）

高校：「日本の人口問題を考える～主体的に考えさせるための工夫～（高2）」

授業者：有馬 麻子（大阪府立富田林高等学校）

最初に有馬教諭から、生徒の実態とこの間に取り組まれてきた「書くこと」に係る授業実践について説明がありました。それによると、これまでに当該学年の生徒たちは、約30本のショートエッセイを「書くこと」など日常的に「書くこと」の指導が行われているとのことでした。また、授業を映像で見る前から、説明をする有馬教諭の語り口を通して生徒への信頼や配慮が伝わりました。

映像での授業の様子は、導入として「30歳の自分」を想像することから始まりました。そして、それぞれの人生設計について考え、社会の在り方について自らの考える述べる機会へと自然と移っていく授業力は見事なものでした。その後、日本の人口変動に起因するさまざまな課題について述べられたエッセイを読み、その解決方法について英語で書くという授業の流れでした。映像を参観した後に、補足として有馬教諭から、授業後に生徒の作品が紹介され、ループリックに依拠するものだけでなく、自分の意見をしっかりと書いてきた生徒の実例が示されました。

質疑応答では、社会問題の解決策を考える場面では、L1の活用もすべきではないかという意見や、学習評価の在り方について質問が出されました。

最後に指導助言として大阪府教育庁の松下信之主任指導主事から全て1授業時間で詰め込もうとしているので授業が誘導的になっていることや、評価に係るループリックの在り方について助言がなされました。

信田 清志（大阪府教育センター）

## ワークショップ

中学校：「ワクワクする仕掛けでやり取りを促す～デザイン力が授業を変える～」

発表者：横山 聖（寝屋川市教育委員会）

高校：「題材を発展させた『思考力・判断力・表現力等』を育てる言語活動」

発表者：宮崎 貴弘（神戸市立葺合高等学校）

## シンポジウム

「学力差にいかに対応したらよいか～遅れがちな生徒への対処法について考える」

提案者：山崎 寛己（松原市立松原第七中学校）

武田 富仁（群馬県立板倉高等学校）

米崎 里（甲南女子大学）

コーディネーター：加賀田 哲也（大阪教育大学）

## 講演

「その指導，本当に効果的ですか？ — 即興性と4技能入試をめぐる —」

講演者：鈴木 寿一（桃山学院教育大学）

鈴木寿一先生は大阪府の高等学校に始まり，京都教育大学，京都外国語大学，そして桃山学院教育大学と長年にわたり英語教育に従事されてきた。これまでの豊富な指導経験と研究活動に基づく講演は，実に明解で説得力があった。

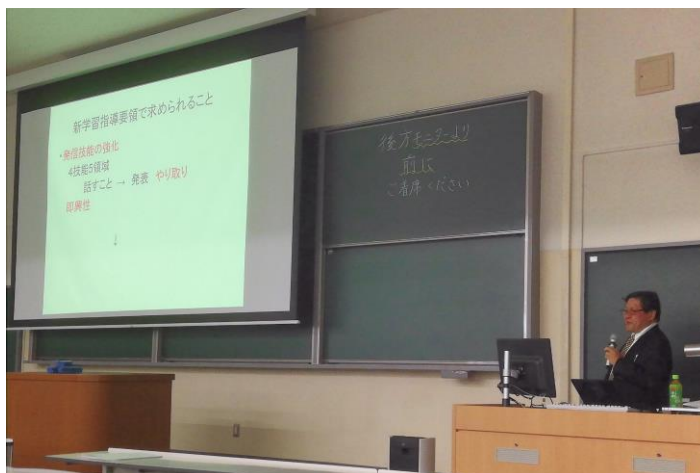
講演は，先生が準備されたチェック・リストにより，まず参加者が全員，日頃の授業内容を診断することから始まった。その結果を各自が確認しながら，先生のお話に耳を傾けた。お話は「4技能5領域の下位能力を伸ばす指導」についてであり，広範囲に及んだが内容的には濃いものであった。提案されたすべての指導手順は，その学習効果を確認する綿密な研究結果から考えられた理論に基づくもので，聞いていてなるほどとうなずける内容であった。

参加者の一人として私がことに興味を持ったのは，意味理解をともなうリーディング活動と語彙指導の活動である。リーディング活動については，先生の紹介された read aloud and listen and repeat, 語彙指導の活動については語彙リストによる英日クイック・レスポンスと変形ペア・ワークの指導手順が大変示唆的であった。

本日の先生のお話は，毎日の指導計画にすぐに反映できるという点で，教育実践に従事する私たちにとり有意義なものであった。参加者は先生が提示された幅広い指導方法のうちから，自分の指導環境に応用できるものから少しずつ実践いただけたらと願う。

先生の今後の益々のご活躍とご健康を祈念してやまない。

大喜多 喜夫（関西学院大学）



## 関東支部 第25回 秋季研究大会報告

2019年11月10日（日）東京家政大学において第25回秋季研究大会が行われました。今回は，大きなテーマとして「授業づくり」に重点をおきました。

## ビデオによる授業研究と協議

中学校：「中学3年生：自分の町について考える — 現在完了（継続）の導入から表現まで」

授業者：木村 祐太（石川県・白山市立北星中学校）

分析者：谷口 友隆（神奈川県・相模原市立大野南中学校）

木村祐太先生による中学校3年生の授業のビデオを視聴し、皆で分析・研究をしました。とても丁寧な導入で生徒も真剣に先生の授業を受けている姿が印象的でした。生徒は自らの経験や思いを主に現在完了形を用いながら言葉を発していました。分析者の谷口先生の「授業を平面から立体に」というアドバイスがとても印象的でした。「ことば」として英語を生徒に意識させ、内容や意味を重視した授業を展開することが大事であるというメッセージをこの授業研究を通して学ばせていただきました。



中島 利恵子（新島学園中学校・高等学校）

## 研究実践報告

<第1会場>

①「人物伝のレッスンを「自分ごと」として考える授業実践 —国際バカロレアの「10の学習者像」に着目して」

発表者：安田 明弘（武蔵高等学校中学校）

この発表では、様々な教科書のトピックになっている、いわゆる人物伝をどのように扱うかを再考し、デメリットをカバーするような授業の流れが示された。そのデメリットというのは、題材によって適切なアウトプット活動をその都度考えなければならないことや、「なぜその人物を学ぶのか」という根本的な問いに答えられていないというものであった。発表者は、国際バカロレアの「10の学習者像」や、「本質的な問い」などを文献などから引用し、授業改善を行った様子が本発表で見られ、授業での「問い」の重要性を強く認識し、学びの多いご発表であった。





## ②「自己表現に向けた small talk の活用」

発表者：山城 仁（東京学芸大学附属世田谷中学校）

この発表では、small talk をいかに授業中に効果的に活用していくかが示された。また、small talk を通して、生徒の習得状況のアセスメント、そして small talk を通して生徒の英語運用力を高めていくことが重要であるということであった。発表者は、勤務校での実践を通して、生徒が思わず聞きたくなる話が展開されたり、自然なやりとり、双方向の対話が生まれることなどが small talk の活用から見られる効果であるということ述べていた。私もこの意見に強く共感し、ご発表から学んだことを次の授業へ生かしていきたいと思いました。



今田 健蔵（東京大学教育学部附属中等教育学校）

### <第2会場>

## ①「話すこと [やり取り] を成立させるための質問文の指導」

発表者：鈴木 千貴（神奈川県・横浜市立桜丘高等学校）

英語で対話を継続する力を、どう育てるのか？新しい学習指導要領実施に向けての、課題の一つです。鈴木先生は高校の教室で、相手の発話に応じて適切な質問文を即座に返す、という活動を継続して行いました。その進め方を、実際のワークシートを用いて、参加者に実際に体験していただく形で報告されました。最初の発話自体に、うまく質問を引き出せるものとそうでないものがある、といった事実は、実践してみたからこそ分かったこと、として参考になりました。



## ②「英語大好きからの一步前進 —第6学年児童の「やり取り」の具体像」

発表者：石川 雄一郎（神奈川県・海老名市立今泉小学校・有鹿小学校）

学校全体で外国語の研究に取り組み、児童の学習意欲を向上させることができた。この成果を受けて、さらにそこから先の子どもたちの成長を目指していった実践の報告でした。目的、場面、状況、必然性などの重視、十分な練習時間の設定、発表の際の「コース選択」の導入、などの工夫を通して力をつけた子どもたちの姿を、映像で見ることができました。小学校でも高学年の授業では、笑い声や歓声ばかりを求めなくて良い、という石川先生の指摘には、実践の積み重ねを通したからこそその重みを感じました。



大鐘 雅勝（千葉市英語教育支援員）

### <第3会場>

#### ①「教科書に+αする表現活動の工夫」

発表者：菊池 智美（東京学芸大学附属世田谷中学校）

菊池先生が、日々の授業を通して、生徒に付けたい表現力として(1)日々の些細なことを楽しく英語で語りあえる。(2)見聞きしたことを自分なりの言葉で reproduce できる。(3)出来事や得た情報について、自分の気持ちや考えを言える。(4)自分の扱える英語で柔軟に表現しようとする。これら4つを示され、その力を付けるための指導例を紹介してくださいました。What's new? という活動、retelling に自分の考えを加える What do you think? という活動、英語落語を演じてみようなどです。どの活動においても、生徒の気持ちや感情を引き出し、そこから発せられる生徒の表現を大事にされていました。ビデオ視聴で、生徒が自分の感情を入れて英語落語を生き生きと演じていた姿が印象的でした。



原田 博子（東京都・文京区立第十中学校）

## ポスターセッション

「材料の味付けについての一試み ―資格試験の活用と他教科との連動」

発表者：三串 浩司（兵庫県立神戸高塚高等学校）

「コア・カリキュラムから考える外国語活動・外国語の校内研修」

発表者：松崎 奈穂（埼玉県・上尾市立原市南小学校）

「描く英文法 ―大学初等英語教育と TOEIC 講座におけるセンテンスダイアグラムの活用」

発表者：伊藤 雄馬（富山国際大学）

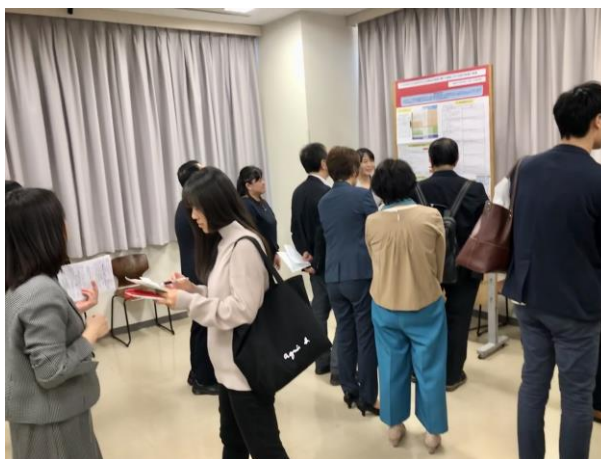
「やり取りにおける児童への働きかけの工夫」

発表者：服部 正史（埼玉県・久喜市立菖蒲小学校）

「B6 の白紙を用いた文法学習」

発表者：真島 由朱（大阪府立箕面高等学校）

ポスターセッションでは、小学校から中学校、高校、さらには大学まで多くの先生方にご発表頂いた。高校における英語文法の教え方から、小学校における英語教科化に向けての研修会の実施についての発表など、内容も多岐にわたったものとなった。小学校英語の教科化をはじめとする校種間の連携・つながりが時事的トピックであるが、そのような視点においても、発表の先生方と参加された先生方が他校種の指導や教科としての実態を垣間見ることのできる機会となった。また、発表者の先生方とその発表に参加された先生方同士で意見や情報などを交換し合い、発表の資料や説明に対して即座にその場で質疑応答が行われた。ポスターセッションならではの、発表をする側と聞く側の短い距離の近さが感じられた。



樋口 智之（神奈川県立上矢部高等学校）

## ビデオによる授業研究と協議

高校：「コミュニケーション英語Ⅲ：次期学習指導要領を見据えた生徒の“英語力”を高める授業」

授業者：嶋田 拓哉（千葉県立船橋啓明高等学校）

分析者：狩野 晶子（上智大学短期大学部）

船橋啓明高校の嶋田先生の授業は、採用から4年目にも関わらずとても学ぶべきことが多い授業であった。まず1つめに挙げられる点は、当たり前のことではあるが全て英語で行なっていたという点である。生徒がついてこなかったり、授業をどう展開していいかわからず、全て英語で行うことに心が折れてしまいそうになることもある。しかし、嶋田先生が1年生から継続しているだけあり、先生の流暢な英語にも生徒はしっかりと反応していた。2点目にワークシートも生徒が教科書の内容をまとめ、生徒自身で整理するために丁寧に作られていた。また生徒が授業に食いつかさせるためにICT機器をしっかりと使用していた点もとても参考になった。自分自身4年目のときに嶋田先生ほどの授業ができていたかと振り返り、比較してみると嶋田先生の授業にはとても感心させられる。嶋田先生の授業を参考にして、また明日から生徒が主体的に考え、思考し、判断できるような授業を展開していきたい。



江尻 友也（千葉県・流山市立おおたかの森中学校）

## 講演&ワークショップ

「教師として成長するため－授業づくりを考えましょう」

講演者：太田 洋（東京家政大学）

関東支部で太田先生のワークショップ形式の講義は久しぶりだったと思います。最初に、KellermanのU字型発達曲線を紹介され、「習得って何でしょうね？」という問いを投げかけました。確かに、頭の中でパターンや規則性を見いだそうとしている時期が大切です。そのU字の下がる時期が大切です。この時期を経て規則性を身につけて正しい英文を作ることがで



きます。この自由に発話できる機会を与えることが大切だとお話しになりました。

また、内容と言語がコントロールされた活動も大切だけれども、自由な発話を促すような内容も言語もコントロールされていない活動をやってみてはどうでしょうか。

次に小学校では多く取り入れている中間振り返りを取り入れてみてはどうかと提案されました。授業中にまずやらせてみると、児童・生徒は今までに習った言葉を使って何とかしようとしめます。そして中間振り返りを行い、再確認します。そして最後にできたこと、できなかったことを振り返ってみてはどうでしょうか。

PPP(Presentation-Practice-Production)と TBLT(Task-Based Language Teaching)の比較を提示されました。そして、U字型発達曲線にもあるように、生徒にやらせてみて、「どう言ったらいいのだろう」という「困った経験」をさせることが必要であると提案されました。

最後にグループで実際の英語使用場面を想定してタスクを作るワークショップを行いました。指導する文法事項を想定し、使用場面を作りました。

教師と児童・生徒とのインタラクションを通じて、英語を少しずつ習得していくのだということを再確認しました。児童・生徒が間違ったときにどうケアするのが大切だと実感しました。日々自分自身の教え方を再考することが必要だと感じました。あつという間の100分でした。

最後に小学校英語に関する阿野先生との共著も紹介されました。日々学ぶ姿勢を学びました。ありがとうございました。

武田 富仁 (群馬県立板倉高等学校)

英語授業研究会本部事務局：〒577-8505 大阪府東大阪市御厨栄町 4-1-10

大阪商業大学 吹原颯子研究室